

令和 2 年 6 月 2 日現在

機関番号：62501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K03173

研究課題名（和文）朝鮮半島西南部の前方後円墳をめぐる倭と馬韓の交渉史

研究課題名（英文）Reconstruction of the History of Japan-Korea Relations in the KofunPeriod of Japan and the ThreeKingdoms Period of Korea

研究代表者

高田 貫太（TAKATA, Kanta）

国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・准教授

研究者番号：60379815

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：朝鮮半島西南部における三国時代の遺跡の調査・研究成果に基づいて、5世紀後半から6世紀前半頃に造営された前方後円墳を、当地域に根拠を置いた政治勢力（栄山江流域社会）の観点から歴史的に位置づけた。前方後円墳をきずいた集団と現地の伝統的な古墳をきずいた集団の関係が、対立や協調をふくみこんだ「併存的」な関係であることを明らかにした。そのうえで栄山江流域社会が百済の社会統合の動きへ対応する1つの方策として、前方後円墳を採用したと判断した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、古代の日朝関係史にとって長らく議論の対象となっている朝鮮半島の前方後円墳の歴史的な性格について、日韓の共同研究という形で検討を行ったものである。それによって、古代から現代、そして未来へ続く、日本列島と朝鮮半島の人びとの関係史像の一端をより具体化することができた。

また、韓国人と日本人の研究者がひざを突き合わせて議論を重ねることを通して、学術的な交流関係を深めることに務寄与することできた。

研究成果の概要（英文）： Based on our investigation and research result covering the archaeological sites of the Three Kingdoms period in the southwestern part of the Korean Peninsula, this project identified the historical meaning of round keyhole tombs built from the late fifth to early sixth centuries from the perspective of the group that founded their political powers in the Yeongsan River basin society. We also revealed that the relationship between the group that built round keyhole tombs and the original locals who built pre-existing style of tombs was a “concurrent” one involving both confrontation and cooperation. This finding suggests that the Yeongsan River basin society strategically adopted round keyhole tombs in order to respond to the Baekje movement of integrating societies in the peninsula.

研究分野：考古学（古代の日朝関係史）

キーワード：古墳時代 朝鮮三国時代 日朝関係史 栄山江流域 前方後円墳 倭系文物

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

従来の研究 倭の固有の墓制と考えられてきた前方後円墳が、朝鮮半島に存在することが発掘調査によって確認されたのは、1990年代前半である。そして、1990年代後半以降に、その年代、墳丘構造、埋葬施設や埴輪・副葬品の系譜、被葬者像、日朝関係史における位置づけなどが活発に議論された。特に前方後円墳の被葬者の性格について論争が本格化し、多くの成果が公表された。その内容は大きく「在地首長説」、「倭系百濟官人説」、そして「集団渡海した倭人説」にまとめることができる(註1)。朝鮮半島西南部の前方後円墳の被葬者像について、現在においても議論が継続し、かつ厳しく対立しているのは、この問題が5、6世紀における日朝関係のみならず、倭における前方後円墳の意義を考えるうえで避けては通れない課題であるからである。

3つの課題 しかし、これまでの研究には大きく3つの課題がある。1つは、朝鮮半島西南部、特に栄山江流域の前方後円墳を構成するさまざまな属性には、倭系の要素以外にも、実に多様な要素(馬韓、百濟、加耶など)が認められる点について、あまり注意が払われてこなかった点である。2つめは、造営当時の半島西南部の伝統的な墓制とは、「排他的・対立的」な特殊な墓制であるという視点が暗黙裡に前提となっていた点である。3つめに、倭あるいは百濟の視点から被葬者像が議論され、そして被葬者論に集中するあまり、半島西南部に位置した馬韓やそれを構成する地域集団とのかかわりが等閑視されてきた点である。

課題の克服と本研究の必要性 申請者はこれまで、古墳時代における百濟・新羅・大加耶と倭の交渉史を研究してきた(註2)が、朝鮮半島の前方後円墳については言及をむしろ避けてきた。しかし、上の3つの課題を認識し、近年では半島の前方後円墳に関する研究を進めている。その中で、当時の交通路との関わりからみると、馬韓社会における前方後円墳の造営集団は必ずしも特殊な存在ではなく、伝統的な方台形墳の造営集団とも「併存的」な関係、すなわち、ともにさまざまな人、情報、物資のやり取りを行う関係であったと評価したことがある(註3)。

上述のように、被葬者論に偏った研究が盛んであった1990~2000年代とは異なり、現在では朝鮮半島西南部における墓制、集落、生産遺跡などの調査が急速に進展している。前方後円墳自体の調査成果も相次いで公表され、それに基づいた馬韓社会の構造や対外関係に関する研究も韓国学界において盛んに行われている。しかし、日本の学界では、最新の成果に基づく前方後円墳の再検討は行われておらず、従来の被葬者論をほぼそのまま踏襲している。したがって、馬韓社会における前方後円墳の歴史的な性格を改めて再検討する、最適かつ必要な時期と判断した。

そこで、馬韓の集落や墳墓(前方後円墳も含めて)の調査研究に実際に携わっている韓国人研究者とともに共同研究を進めることによって、韓国側の最新の成果に基づきつつ、半島西南部の前方後円墳を再評価し、その中で倭と馬韓の交流史を再構築していきたいと考え、本研究を立案した。

註1: 朝鮮学会編,『前方後円墳と古代日朝関係』,同成社,2002

大韓文化遺産研究センター編,『韓半島の前方後円墳』,学研文化社,2011

註2: 高田貴太,『古墳時代の日朝関係 新羅・百濟・大加耶と倭の交渉史』,同成社,2014

註3: 高田貴太,「栄山江流域における前方後円墳築造の歴史的背景」『内外の交流と時代の潮流』,同成社,2012

2. 研究の目的

朝鮮半島西南部における三国時代遺跡の調査・研究成果に基づき、5世紀後半から6世紀前半頃に当地域に造営された前方後円墳を、当地域に根拠を置いた政治勢力たる馬韓の観点から歴史的に位置づける。それによって、これまで倭や百済の立場が強調されがちであった前方後円墳の造営をめぐる、倭と馬韓との交流史を再構築する。特に、以下のa~dの課題に取り組む。

- a. 半島西南部の集落・墳墓資料の集成・分析作業から当地域に位置した馬韓社会の構造を明らかにする。
- b. 半島西南部の外来系資料（前方後円墳を含める）の系譜を再整理し、馬韓の対外関係を明らかにする。
- c. a・bの成果から馬韓社会における前方後円墳造営集団の役割や性格を明らかにする。
- d. a~cの成果を総合化し、前方後円墳造営をめぐる馬韓と倭の政治経済的な交流関係を再構築する。

3. 研究の方法

まず5世紀後半から6世紀前半における朝鮮半島西南部の集落や墳墓資料を集成する。次に、数値地図データを活用した詳細な地形図に、拠点集落や墳墓の位置を落とし込み、分布図を作成する。そして現地踏査や最適経路計算機能を用いて古代交通路を推定し、それと集落、墳墓との相関性を検討する。この作業を基礎とし、集落や墳墓の規模・特徴、在地系の墳墓と前方後円墳の位置関係などの分析をまじえ、馬韓の社会構造を明らかにする。

上述の作業と並行して、前方後円墳の諸属性（特に埋葬施設・副葬品・埴輪）や他遺跡出土の外来系資料の系譜関係を再整理し、前方後円墳造営期の馬韓の対外関係の実態を明らかにする。

最後に、この2つの成果を総合化し、前方後円墳の造営をめぐる倭と馬韓の交流史を描く。

4. 研究成果

本研究の課題は、朝鮮半島西南部における三国時代遺跡の調査・研究成果に基づき、5世紀後半から6世紀前半頃に当地域に造営された前方後円墳を、当地域に根拠を置いた政治勢力たる馬韓（栄山江流域）の観点から歴史的に位置づけることにあった。栄山江流域における古墳や集落、そして土器生産の動向については、5世紀初頭、中葉、そして5世紀末~6世紀初に集落や古墳の変動が確認できた。そこには百済圏の生活や墓制の様式の伝播とともに、倭との交流も大きな要因となっていたようである。栄山江流域に点在する集落や古墳の規模や構造は5世紀中ごろに序列化し、そこに大きな政治的変動があったことを想定しえる。

栄山江流域社会の性格については、6世紀前半までの栄山江流域は、百済との関係の中でも主体的な成長をとげていた社会（地域社会）と判断しえる。そして、栄山江流域において前方後円墳の造営が終了し、百済中央の墓制たる「陵山里型石室」の受容をもって、百済に編入されたとみる。栄山江流域の前方後円墳には、埋葬施設や副葬品、外表施設（葺石や埴輪）などに、倭以外にも実に多様な要素（栄山江流域、百済、加耶など）が認められることが、あらためて確認された。また、在地の伝統的な古墳にも、倭や百済の埋葬施設や副葬品が認められることも明らかとなった。そして、3、4世紀から連綿と墳墓がきずかれていく墓域に前方後円墳が位置する事例も確認され、在地の造墓活動の中で、前方後円墳がきずかれる状況も指摘できた。

それによって、前方後円墳をきずいた集団と在地の伝統的な古墳をきずいた集団の関係

が、対立や協調をふくみこんだ「併存的」な関係であることが浮き彫りになった。したがって、栄山江流域社会が百済の社会統合の動きへ対応する1つの方策として、前方後円墳を採用したという評価が、妥当と考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 高田貴太	4. 巻 -
2. 論文標題 古墳時代の朝鮮半島西南部と倭の交渉における海南地域	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 海南半島における馬韓古代社会の再照明	6. 最初と最後の頁 135-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田貴太	4. 巻 -
2. 論文標題 古墳時代の西日本地域における港関連遺跡と鳳凰洞遺跡	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 金海鳳凰洞遺跡と古代東アジア	6. 最初と最後の頁 233-270
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田貴太	4. 巻 -
2. 論文標題 朝鮮半島西南部と西日本地域の交流についての予察	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 栄山江流域の馬韓諸国と楽浪・帯方・倭	6. 最初と最後の頁 149-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田貴太	4. 巻 -
2. 論文標題 冠をめぐる百済・栄山江流域と倭の交渉についての予察 - 倭における広帯二山式冠の盛行以前を中心に -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 羅州新村里金銅冠の再照明	6. 最初と最後の頁 84-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田貴太	4. 巻 204
2. 論文標題 海の向こうから前方後円墳体制論を考える	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『歴博』	6. 最初と最後の頁 6-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田貴太	4. 巻 4
2. 論文標題 竪穴系横口式石室・竪穴式石室・木柵の構造	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『韓日の古墳』 「日韓交渉の考古学 - 古墳時代 (三国時代) - 」研究会	6. 最初と最後の頁 131-165
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 高田貴太, 金跳咏	4. 巻 137
2. 論文標題 装身具生産	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『季刊考古学 (特集 古墳時代・渡来人の考古学)』 137号	6. 最初と最後の頁 37-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 高田貴太
2. 発表標題 古墳時代の日朝交渉における海の道 - 朝鮮半島南・西海岸地域の倭系資料の分析から -
3. 学会等名 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群特別研究事業第1回国債検討会 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高田 貴太
2. 発表標題 海の向こうから見た古墳時代の東日本
3. 学会等名 考古学研究会第47回東京例会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高田 貴太
2. 発表標題 冠をめぐる百済・栄山江流域と倭の交渉についての予察 - 倭における広帯二山式冠の盛行以前を中心に -
3. 学会等名 国立羅州博物館特別展『新村里金銅冠 その時代に出会う』国際学術大会 羅州新村里金銅冠の再照明（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高田 貴太
2. 発表標題 朝鮮半島西南部と西日本地域の交流についての予察
3. 学会等名 全羅南道2017学術大会 栄山江流域の馬韓諸国と楽浪・帯方・倭（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高田 貴太
2. 発表標題 竪穴系横口式石室・竪穴式石室・木槨の構造
3. 学会等名 第40回韓国考古学全国大会 第3自由パネル「韓日の古墳」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 高田 貴太
2. 発表標題 日朝関係史と「磐井の乱」 考古学の立場から -
3. 学会等名 日本史研究会5月例会（招待講演）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 高田 貴太	4. 発行年 2017年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 304
3. 書名 海の向こうから見た倭国	

1. 著者名 高田 貴太	4. 発行年 2019年
2. 出版社 KADOKAWA	5. 総ページ数 288
3. 書名 「異形」の古墳 朝鮮半島の前方後円墳	

1. 著者名 高田 貴太	4. 発行年 2019年
2. 出版社 zininzin (韓国)	5. 総ページ数 278
3. 書名 朝鮮半島から見た古代日本 (韓国語)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	李 暎澈 (Lee Youngcheol)		
研究協力者	金 洛中 (Kim Nakjung)		
連携研究者	廣瀬 寛 (Hirose Satoru) (30443576)	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・主任研究員 (84604)	
連携研究者	諫早 直人 (Isahaya Naoto) (80599423)	京都府立大学・文学部・准教授 (24302)	